博士学位論文審査要旨

２０２２年　１月　１９　日

論 文 題 目：　変化と現状維持の政治力学―政体 EU の現在―
学位申請者：　佐竹　壮一郎
審 査 委 員：
　主　査：　法学研究科　教授　　鷲江　義勝
　副　査：　法学研究科　教授　　浅野　亮
　副　査：　法学研究科　教授　　力久　昌幸

要　　旨：

EU は時代に応じて異なる顔を私たちに見せてきた。それゆえ、欧州統合の現在を捉えるレンズにも、EU の更新に合わせた定期的な調整が必要である。とりわけ、21 世紀の EU では、①危機の常態化、②2 つの非指導者層（EU に対して積極的な政治参加が期待される合理的な EU 市民・ポピュリストを支持する真の人民）の台頭という 2 つの現象が生じたことから、そのピントの調節が求められていた。

これまでの研究は、①短期的な統合の波への着目、②2 つの非指導者層に対する高い関心の反動として生じた、「彼ら」側に位置する EU に関する解像度の相対的低下、③亀裂に関する分析が進展した一方、発展途上にある総体としての EU の理解、以上 3 つの課題を抱えていた。本稿ではこれらの課題を踏まえ、①EU を主眼に置いた分析、②政治的エリートや合理的な EU 市民、真の人民間での交錯への着目、③政体 EU（政治的アクターとしての政体 EU、空間としての政体 EU）という視座の提示、④EU に働く変化と現状維持の政治力学の設定を行った。

様々な境界線が引かれることで逆統合や分断が進んでいるようにも見える EU は、なぜいまもなお存続しているのか。EU ではどのような変化ないし現状維持の政治力学が働いているのか。以上の問いの検討を通じて、本稿は空間としての政体 EU において、統合に対する動機が交錯している様相を明らかにすることを目的としている。

本稿の結論として、大きく 2 つ挙げられる。第 1 に、変化と現状維持という次元で EU を捉えた本稿の分析を通じて、統合と逆統合の中で揺らぎ続ける変動の激しい EU というよりは、変化の圧力を受けつつも現状維持の力が強く働いている EU の姿が明らかにされた。第 2 に、人々の統合に対する動機が EU 内部で交錯することから生じるズレである。統合を通じて境界線が薄く感じられるようになったとしても、それぞれの価値観や統合に対する動機は容易には変わらないのであった。

拡大と深化および統合と逆統合という枠組みで EU を捉えると、無数の境界線の策定による統合の停滞や EU の揺らぎは問題視されよう。他方、本稿の分析を通じて、EU における不安定さを所与のものとして捉える視座が提供された。今後も EU は揺らいで見えるだろう。だが、人間に動機というものがある以上、境界線は引かれ続ける。様々な者の統合に対する動機が行き交うという観点では、空間としての政体 EU は不安定な「想像の政治共同体」であり続けるのである。

よって、本論文は、博士（政治学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０２２年　1月　１９日

論 文 題 目：　変化と現状維持の政治力学―政体 EU の現在―
学位申請者：　佐竹　壮一郎
審 査 委 員：
　主　査：　法学研究科　教授　　鷲江　義勝
　副　査：　法学研究科　教授　　浅野　亮
　副　査：　法学研究科　教授　　力久　昌幸

要　　旨：

２０２２年1月１９日午前１１時から１２時にわたって、佐竹　壮一郎氏の博士論文の総合試験を実施した。

最初に、本論におけるポピュリズムと権威主義あるいは全体主義との関係、それに関連して新旧の権威主義の相違点、さらには、EU の強靭姓ブレクジットとの関係あるいは、EU を維持するためのコストの問題など EU の正当性に直接に関わる質問がなされた。

また、政体 EU という分析枠組みの普遍性の問題、拡大と深化あるいは統合と逆統合以外の新しい概念の分析手法の追求について質問がなされた。また、合理的 EU 市民の概念規定について、さらには、EU の現状維持力の強さ、特に極右勢力に対する対応などについて質問が重ねられた。

いずれの評価や質問に対しても博士論文の趣旨に沿った、明快な回答が得られ、審査委員一同、十分に納得し、この解答に関しても高い評価を行った。

なお、語学に関しては、参考文献の利用状況から英語を合格と認めた。

以上のことから総合試験の結果は合格であると認めた。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 変化と現状維持の政治力学―政体EUの現在―

氏　　名： 佐竹　壮一郎

要　　旨：

シューマン宣言から約70年が経過した。この間統合を進めたEUは時代に応じて異なる顔を私たちに見せ続けてきた。そのため、EUの更新に合わせて欧州統合の現在を捉えるレンズにも定期的な調整が必要となる。とりわけ、21世紀のEUでは次の2つの現象が生じたことから、そのピントの調節が求められていた。第1に、EUにおける危機の常態化である。欧州憲法条約の批准が原加盟国のフランスとオランダで否決されたことを皮切りに、EUはユーロ危機や移民・難民危機、ブレグジット、安全保障危機、コロナ危機など、恒常的な危機下にある。第2に、EUにおける2つの非指導者層の台頭である。まず、合理的なEU市民の台頭が挙げられる。マーストリヒト条約におけるEU市民権の創設を契機として、EU市民のEU政治への参画に対する関心が集まり、様々な枠組みが提案、構築された。ところが、2010年代に入ると極左および極右政党が台頭し、それらを支持する真の人民と呼ばれる非指導者層がEU政治の舞台に登場した。そこで、ポピュリズムの視座を通してヨーロッパ政治を理解する試みが進められた。

こうした先行研究の見方は大きく3つの課題を抱えていた。第1に、欧州統合の捉え方についてである。かねてより、欧州統合は①拡大と深化、②統合と逆統合という2つの枠組みから理解されていた。前者は加盟国数の拡大や制度的な深化を通じた統合の動向に着目する一方、後者はEUの権限縮小や域内での亀裂、加盟国の脱退に焦点を当てていた。だが、それぞれの視座は、危機やそこからの回復のいずれか一方に焦点を当てるため、短期的な統合の波に左右されやすかった。第2に、合理的なEU市民に関する研究にせよポピュリズム研究にせよ、主な着目点はEUではなくその挑戦者側に置かれていた。それゆえ、ここで「彼ら」に位置するEUの解像度は相対的に下がっていた。第3に、亀裂に対する関心の高さによって生じる問題である。21世紀に生じた様々な危機も相まって、EUにおける境界線を軸とした包摂と排除の実態を捉える機運が高まった。しかしながら、総体としてのEUを掴むことはますます難しくなっている。

先行研究の課題を踏まえ、本稿では次の4つの観点からEUを捉えている。第1に、本稿では「彼ら」または「腐敗したエリート」の代表格であるEUにも焦点を当てている。挑戦者側の動向だけでなく、政治的エリートの統合に対する動機を捉えることで初めて、EU全体の営みを理解することが可能となる。第2に、本稿は政治的エリートや合理的市民、真の人民間で生じている断絶ではなく、交錯の様相に着目している。たしかに、EUではエリートと大衆の亀裂が存在する。だが、彼らは境界線上でいがみ合っているだけではない。互いを刺激し、交錯する過程を通じてEUは構築されているのである。第3に、こうした交錯が織りなされる政体EUの捉え方についてである。具体的には、次の2つに政体EUを分類する。まず、意思をもつ政治的アクターとしての政体EUである。例えば、規範的政体としてのEUはこの観点から政体EUを理解しているといえる。次に、空間としての政体EUである。多数の入れ子状態にある政体では、それぞれの箱が空間を構築しつつも、小さな単位はより大きな単位に属している。EUもその1つの箱にあたる。そして、本稿では空間としての政体EUにおいて交錯している統合に対する様々な動機に着目している。第4に、EUに働く変化と現状維持の政治力学についてである。先に挙げた①拡大と深化、②統合と逆統合という2つのレンズの課題を鑑み、本稿では指導者層と非指導者層との関係から、欧州統合において働く変化と現状維持の政治力学を設定した。ここでの変化

の政治力学とは、政体EUという空間の中で、非指導者層がアクターとしての政体EUに対して力を加えている状態と定義される。統合にせよ逆統合にせよ、EUは非指導者層の圧力を受けることになる。ただし、こうした圧力が加えられたとしてもEUが変化するとは限らない。そこで本稿では、EUに働いている現状維持の政治力学を、①解決策としてのEU像が規定された中で、「静かな」市場統合を進める方向に力が加わっている状態、②EU27の枠組みに規定された政治的エリートの営みを優先する方向に力が加わっている状態の2つに分類した。このような変化と現状維持という次元を設定することで、欧州統合における過剰な期待ないし落胆を避けられるだけでなく、EUにおける動機に着目した分析が可能となる。

様々な境界線が引かれることで逆統合や分断が進んでいるようにも見えるEUは、なぜいまもなお存続しているのか。EU ではどのような変化ないし現状維持の政治力学が働いているのか。以上の問いの検討を通じて、本稿の目的は空間としての政体EUにおいて、統合に対する動機が交錯している様相を明らかにすることである。

本稿の結論として、大きく2つの観点から再構成して論じたい。第1に、変化と現状維持の政治力学に基づいてEUを捉える意義である。まず、変化の力学を捉えるために、本稿ではEUにおける「政治化」を軸に据えて分析した。従来、EUは政治的エリートだけが共有するものであり、非指導者層には縁のない存在とされていた。ところが、「政治化」が2つの形で立ち現れることにより、政体EUという空間において非指導者層を無視することは困難となった。1つ目の「政治化」は、「腐敗したエリート」に不満をもつ人民がポピュリストからの刺激を受け、EUに対して異議を申し立てる形で表出した。だが、EU に圧力をかけるのは真の人民だけではない。合理的なEU市民もまた、多様な手段を通じてEUに変化の力を加えていた。これが2つ目の「政治化」である。こうして、かつてEUに対して限定的なアクセス手段しか有していなかった非指導者層は、合理的なEU市民または真の人民としてEUに変化の力を加えるようになった。次に、本稿では現状維持の力学に着目することで、「政治化」が必ずしもEUに変化を生じさせないことを明らかにした。たしかに、ポピュリストやその支持者の行動には逆統合を促す力があるように見える。また、合理的なEU市民も公式の制度を用いて変化の圧力を加えていた。だが、非指導者層からの圧力を受けてEUが変化した事例は限られ、またその水準は決して彼らの満足感を充たすものではなかった。

変化と現状維持という次元でEUを捉えた本稿の分析を通じて、統合と逆統合の中で揺らぎ続ける変動の激しいEUというよりは、変化の圧力を受けつつも現状維持の力が強く働いているEUの姿が明らかにされた。この政治力学は現在注目を集めているEUの強靭性にも示唆を与える。先行研究によっては回復力とも訳され、EUの揺らぎからの回復といった肯定的な文脈で強靭性は使用されてきた。また、欧州委員会を中心に強靭性が政策決定の中心的概念に位置づけられるなど、強靭性の向上がEUでは目指されている。翻って本稿では、EUの構造に変化を促す行為全般に対して現状維持の政治力学が働いていたことを明らかにした。言い換えると、非指導者層の要求に対してもEUは高い強靭性をもっていたのである。こうした多義的な側面を前提にしたうえで、EUの強靭性は分析されなければならない。

本稿で得られた第2の知見は、人々の統合に対する動機がEU内部で交錯することから生じるズレである。まず、変化という圧力を受けながらも自らの論理に基づき統合を続ける政治的アクターとしてのEUの姿が確認された。裏を返せば、政治的エリートからなるEUの視野は狭いということである。こうした状況下で、EUは21世紀に入り「多様性の中の統合」をモットーに掲げ、遂には東方拡大を果たした。そして、EUは自らを多様性の象徴として喧伝した。ところが、EUが想定していた統合は先の現状維持の政治力学に基づいており、西欧を軸とした欧州統合観から抜け切れていなかった。たしかに、東欧諸国は厳しい基準を達成することでEUの加盟国となり、EUの境界線は東へ移動した。だが、人間は簡単には変わらない。東方拡大で東西の境界線が消えることはなかったのである。過去20年間におけるEUの動向は、それぞれの価値

観や統合に対する動機が簡単には変わらないことを示していた。ポピュリズムを通じた境界線の策定もさることながら、多様性の時代ともいえる 21 世紀を通じて、EU では様々な境界線が引かれた。こうして、政治的エリートたる西欧の政治的指導者の認識とは必ずしもかみ合わない解釈が構築され続けている。

空間としての政体 EU には無数の境界線が引かれ、数多くの「われわれ」と「彼ら」が行き交っている。ここには「われわれ」と「彼ら」の軸が多様なだけでなく、ある個人が複数の「われわれ」を有し、複数の「彼ら」を見ていることも含まれる。それでは、統一された 1 つのアイデンティティが確立されていない空間としての政体 EU において、この現象は致命的な問題となるのか。本稿の分析結果に基づけば、それは問題とはならない。さらにいえば、上記の現象は仮にアイデンティティが 1 つに統一されたとしても生じる。統合がなされない場合、なされない枠組みの中で「われわれ」と「彼ら」が形成されるに過ぎない。拡大と深化および統合と逆統合という枠組みで EU を捉えると、統合の停滞や EU の揺らぎは問題視されよう。翻って、本稿における空間としての政体 EU では、こうした不安定さを所与のものとして捉えることを可能にした。統合の有無に関係なく今後も EU は揺らいで見えるだろう。だが、人間に動機というものがある以上、境界線を引く行為がなくなることはない。したがって、様々な者の統合に対する動機が行き交うという観点では、空間としての政体 EU は不安定な「想像の政治共同体」であり続けるのである。